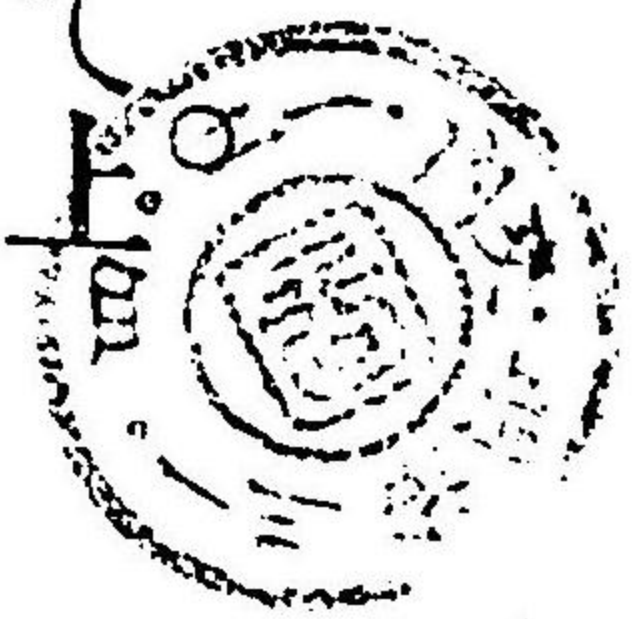


204
248

神道唯一問答書合卷

凡 例

一 此御問答書は上下貳卷書繼壹卷を合冊せしものにて上



下貳卷は天保十三年二月十六日寺社奉行阿部伊勢守より歸村々預の命あり猶不審の廉々畫記し申べしこの事ゆる神明社殿に籠られて一晝夜に記し畢られたるものなり又書繼壹卷は其後三宅の配所より男也刀自に宛て贈り給ひしものなり

一卷中全く寫し誤ご見る節々の外は敢て妄に訂さ

○凡例

ず讀人は其時代に注意して得る所あれ

大人が配所より贈り給ひし教訓書は其が中の緊要なる

もの則 神拜式 祭祓 祝詞歌 身の柱 四命 梨子

察し 等を始め順序を追て此合巻同様の冊子として

世に出さむとす

一此回は諸先生の賛成を得て先づ問答書二巻を發行する

事とはなしぬ

編輯人 遺族 加藤直鐵 志るす

神道唯一問答書合巻目次

- 一 唯一神道
- 一 難病人
- 一 水魚の交
- 一 籠食籠服
- 一 息の教
- 一 正直
- 一 金銀米錢
- 一 祓と神樂
- 一 息の術
- 一 仁義禮智信
- 一 神拜式
- 一 金銀融通
- 一 禮樂
- 一 正直なる者
- 一 神職
- 一 妻子

- 一 天地の心
- 一 親族
- 一 信心得道
- 一 旅立
- 一 籠食少食
- 一 夫婦の心
- 一 腹立
- 一 永世の傳
- 以上
- 一 十種の神寶
- 一 祝詞
- 一 約束違ひ
- 一 神通自在
- 一 悪き行ひ
- 一 不足心
- 一 氣質
- 一 御同門

唯一神道問答書合卷

唯一神道

天眞神の唯一の道は唯此の教あるのみ

或人問曰 唯一神道と申事はいかなる事に候哉
 の日本の神國に生れて神の御末なる身を持ちながら
 其大祖たる天照大神の傳へ給へる皇國の御教を知
 らずして神徳の廣大なる事を辨へざるは情なき
 事と存候まゝ尋申候

答曰 唯一神道と申す事廣大なる御事にて某

○唯一神道

如き不學愚なるものなか／＼もちて其道を能辨へ候と申事には無之候へども神職の身に候へば白川伯王殿御門人に相成候事也る御傳も相受勿體なき御事と存候也る晝夜寢食を忘れ修行候へども生れつき無智のかなしさは其故由も分り難くなげきかなしみ侍りしに御祓の徳には神明を崇め日夜に唱候へば神の方より御守護に預り自から利益を蒙るよし承り日夜修行仕候處不學ながら少々宛は

物の道理も辨へられ候様覺申候是神明の御助加護ぞと喜び申候

春日大神の神託に (倭論語以下同じ)

諸人等神明助受思常慢心退
もろくのひさたちよしんめいのたすけをうけむさおもほつれにまんしんをしりぞ
 けよたさへばいちもうのまんしんのしんめいをへだつるこさおほくものごさし
 氣與 譬 婆 一毛 乃 慢心 乃 神明 平 隔 津留 事 大雲 乃 如 志

此御神託を常に心に忘れず修行いたし候へば唯一神道の御教もほのかにわかり候様覺候古き神語に

一 津乎得 禮婆 一 津 無 志 有 加 登 須 禮 婆 形 無 志 無 加 登 須 禮 婆

○唯一神道

祭神 武甕槌神
 經津主神
 天兒屋根命
 倭論語は八
 十二代帝後
 鳥羽天皇の
 御宇承久元
 年穀倉院別
 常清原良業
 奉勅記録せ
 しものなり

○唯一神道

御靈みたま 安あ利り 是これ 乎を 大元おほもと 乃の 神かみ 登あが 申まを 奉した 留まつ

此御言葉このおんことばをもちて考かんがるに唯一ゆいいつの誠まことを得うれば

天照大神あまてらすおほかみの御心みこころに叶かなひ諸神しよじんの守護しゆごを受うけ其そのなす所ところ

行おこなふ所ところ神慮しんりよにかなふなりと既すでに萬葉集まんえふしふ。大伴宿

禰家持卿ねやかもちきやうの歌うたにも 中臣なかさみのふごのりりといひひ

らひあがふ命いのちもたがためになれ

とあれば往古わうこも唱となへて諸神しよじんの加護かごに預あづかりし事明ことあきら

かに存ぞんじ奉たてまつり候かう又唐國からくにの中庸ちゆうようにも。誠者まこと天之道てんのち

中庸第二十
同章
第二十四

也なり。誠これ之を者まこと人之道ひとのち也なり。又また曰いはく。至誠しせい如しん神の。な

と申候のたまも此事このことかこ存候ぞんかう此誠このまことと申事のたまはいかやうにし

て誠まことに至いたるものなりやと存候ぞんかう處ところ日ひ夜よ寢食しんじよくを忘れ

御祓ほらひ修行しゆぎやう致いたして神德しんさくを仰あふぎ唱となふる聲こゑ枯かれ盡つき果はてし時とき

突息ついき引息ひいきも出兼いでかねる時ときに至いたりて身體しんたい豁くわつ然ぜんとして快こころよ

き事ことを覺おぼは。をしや。ほしや。いとしや。可愛かあいや

の迷まよひの心こころもなく食しよくを思おもひ衣服いふくを思おもひ住所ぢゆうしよを求もとむ

の慾よくなく唯國たいこく恩君おんくん恩師おんおんしの恩親おんおやの恩おんの廣大くわうだいにして忘わす

○唯一神道

れがたく我^{わが}行^{おこな}の悪^あしく淺^{あさ}ましき事^{こと}のみなりと思^{おも}
 ひ後悔^{こうくわい}の涙^{なみだ}膝^{ひざ}をひたし四恩^{しおん}の有^{あり}難^{がた}き事^{こと}身に満^{みち}て
 喜^{よろこ}びの涙^{なみだ}たえやらず此^{この}時^{とき}よりして初^{はじ}て誠^{まこと}の心^{こゝろ}
 いふは此事^{このこと}なるやと思^{おも}ひそれより後^{のち}迷^{まよ}ひの心^{こゝろ}又は
 惰慢^{だまん}の心^{こゝろ}恐^{おそ}しき心^{こゝろ}起^{おこ}る時^{とき}しきりに三^{さん}種^{しゆ}の祓^{はら}唱^{ひな}へ
 候^{あし}へば悪^あき心^{こゝろ}自^{おの}づ退^{しりぞ}きて國恩^{こくおん}の廣^{ひろ}大^{おほ}なる事^{こと}を思^{おも}ひ
 出^{いで}て飲^{いん}食^{しょく}の慾^{よく}を忘^{わす}れ迷^{まよ}ひの心^{こゝろ}も避^{さく}る事^{こと}を覺^{おぼ}へたり
 是^{これ}御^ご祓^{はら}ひの德^{とく}息^{いき}の妙^{めう}要^{えう}なる事^{こと}を知^しる此^{この}息^{いき}は身^{しん}體^{たい}の根^{こん}

元^{げん}にて命^{いのち}の元^{もと}なり故^{ゆゑ}に息^{いき}を止^{とど}めれば人^{ひと}死^しす死^しすれ
 ば身^{しん}體^{たい}滅^{めつ}ぶ然^{しか}らば身^{しん}體^{たい}の根^{こん}元^{げん}は息^{いき}にして此^{この}息^{いき}正^{ただ}し
 ければ心^{こゝろ}正^{ただ}ま^く行^{おこな}ひ正^{ただ}し此^{この}息^{いき}正^{ただ}しか^らず穢^{きた}けれ
 ば心^{こゝろ}あしく行^{おこな}ひ正^{ただ}しか^らざる事^{こと}を知^しる

祭神
素盞鳴尊

氷川大神の神託

黒^{くろ}穢^{きた} 伎^{わざ}心^{こゝろ} 惡^あ久^く難^{がた}為^な者^{もの}纏^{まさ}布^ふ 清^き久^く直^{ただ} 奈^な留^{りゅう}心^{こゝろ} 寶^た録^{ろく}目^め
 出^で度^{たぎ}事^{こと}纏^{まさ}布^ふ 唯^{ただ}神^{しん}明^{めい}乃^の息^{いき}平^{へい}知^ち留^{りゅう}可^か志^し

息の術

○唯一神道

問曰其許は息の術を以て神道の極意の様に申され候息をもちて神道の極秘の傳とするか世間の神道

者は息の事を申さず教の異なるものか又其許獨り息

の事を發明致され候や珍しき事のやうに存候

答曰某全く私の意を以て神道の教をせず勿體

なくも皇國の御寶なる古事記神代卷又は日本

六十餘州の八百萬の御神の御神託天津兒屋禰命

の御子孫天種子命大中臣大連及白川伯王殿御

神祇の四性
王氏、中臣氏、齋部氏、
白川家ハ王
伯は長也神
祇道の長官
統領といふ
義也

家に相傳る御傳の外の事を申さず先息の事は

日本紀神代卷曰伊弉諾尊曰我所生之國唯有朝

霧而薰滿之哉乃吹撥之氣化ニ爲神一號ニ級

長津彦命次級長戸邊命是風神也

同卷曰於是共生ニ日神號大日靈貴一此子光華明彩

照ニ徹於六合之内一故ニ神喜曰吾息雖多未ニ

有若此靈異之兒一

同卷曰於是天照大神乃索ニ取素盞鳴尊十握劍一

○息の術

打_ニ折_ニ爲_ニ三段_一濯_ニ於_ニ天真名井_一齧_然咀_嚼而吹棄氣噴
 のさざりになりませるかみのみなをたごりひめまなす つぎにたきつひめ つぎにいちきしま
 之_ニ狹霧所生神號_一曰_ニ田心姫_一次湍津姫次市杵嶋
 ひめ すべてみはしらのひめがみなりましき
 姫凡 三 女 矣

と神書にかき候子の字息こいふ文字書入候事神書
 の傳のよし夫に習ひて今の世にも息子息女など書
 たるよし是息の事傳へある故よし也これらの事み
 な息の妙を以て御傳なり都て神祕の御傳これなく
 ては確こ分り難き事故其元は一なりと雖ども其人

々の身に引受生れつき得易き所にてさとし得る事
 あり唐國の學びにも其元聖人孔子の教を傳ふるこ
 雖ども其門人各其得る處は替りしと見えたり其
 故は孟子の序にも孔子之道大而能博門弟子能
 みてつくしるこそあたはず 故學焉而皆得ニ其性之所ニ近
 其後離散分ニ處諸候之國一又各以ニ其所ニ能授
 弟子一源 遠 末 而 益 分
 是をもつて見れば後世に至つてはいよく教への

道相分り候事みちあひわがと存ぞんじられ後は古學程子朱子陽明學のち こがくていし しゆし やうめいがくなどいろくあひわがに相分れ又何れの學またいつ がくにても其人の得るそのひさ處ところによりて著述ちよじゆつする書を見るしよ みに各違おのくたがひあり然れども是これをさのみ咎とがむるものなきはみな聖人の教せいじん をしへにて身を修め家を齊さいふるの尊たふさき教をしへなるが故ゆゑなり志こころあれば其元そのもとは神の御傳かみ つたへにて日本書紀古事記にほん しよね こじによらぬはなし是これはまた其御門人そのごもんじん各其身おのくそのみに引受候ひけうけところありて少々宛せうくづいの違たがひあり其故ゆゑは世々學よゝゝまなぶ人の書しよを見る

牽強附會の
説にふらざ
るを證言す

に其説せつまちくなれども邪よこしまの教をしへといふにもあらず新説新法しんせつしんぽふと申まをにもあらず若私もしわたくしに新説新法を申出候いでは、神明しんめいを穢けがし奉たてまつり王法わうほふに違たがひ御罰ごばつを蒙かぶむるもの也なり只我ただわが恐れ慎つしむ所ところにして門人もんじんに常つねにまめし諭さとす處ところなり然しかれども人々の生うれ得うるところは少々宛せうくづいの替かりあり是これはみな其人そのひさの性せいによるものなりされども身を修め心こころの穢けがれをばらひ君きみに仕つかへ父母ふぼに事つかへ九族睦きうぞくむつまじく其身そのみ安やすく無病むびやうたらん事ことをねがふの外ほか

有あるべかくず能々御考かんがへ候たうへ只々かへすくも天地あめつち
の御恩ごおん日夜にちやに忘わすれぬは神道しんたうのはじめこ奉存候

難病人

問曰そのもと其許しんめいは神明いのに祈いのれば病やまひかならず瘡いせること難なん
病人びやうにんを多あつめく集置給そのりやくふ其利益またありや又ふは父母ぼに不ふ
孝かうにして身治みなさまる事ことなく九族きうぞくも是これを捨すて又貧またにして病やまひ
煩わづらひたつきなき者等ものちを養やしなひ置給おきたもふに其許そのもと無禄むろくにし
て何なにをもつて是これを養やしなひ又何またをもちて手當てあて介抱かいほをな

し何なにをもつて教なしへ諭さとし導みちびき給たまふや其不審そのふしん更に晴はれず
世よの人疑ひさうたがひ迷まよひてさまぐの説せつを申者ものあり委くはしく
其故そのゆゑよしを申給たまへ

答曰わがまなびこれ我學いるに入もこの元もとなり我父わがちい眞鐵まがねなる者世ものよの人
の病やまひにごぢられ貧ひんに苦くるしみ家風かふうあしく成行なりゆ又または生うま
れつき氣質きしつあしく身治みなさまらず九族きうぞくを惱なやますを患うれひ終つひ
に病やまひ成なり十ヶ年ねんの間あひだ寢食しんじよくを思おもはず二階にかいに引籠ひきこもり
て家内かないの者ものにも交まじはらず晝夜ちうや思おもひ念おもひて諸書しよくによ

り考かんがへを疑うたがす事長ことながき年月としつき忘わすれずかく思おもひに沈しづたまは、病募やまひりて命いのちも危あやふからんさす親族種しんぞくしゆ々に諫いさむれども改あらためかふる事ことなく終つひに十一年目じゅうねんめにて某それがしが兄成あになるものに家督かどくをねがひ隠居いんきよして老おいを待まつのみ其時そのとき某年とし六七才ころの頃ころより拾歳さいに餘あまれるの頃ころなり然しかるに我弟わがおとうとなる者なのありて母ははこれを抱だ寝ねして某ちちは父おきと起おき臥ふしを同おなじくなせり故ゆゑに父母同居ふほごうきよせずして年月としつきを送おくるまかるに父ちちの學友がくいう三四人常きたに來きたりて夜よは鷄鳴けいめいの

頃ころまでも身みを治をさめ家いへを齊さいへ病びやうじや者貧者ひんじやまた又は老おいてたつき無なきものを助たすけ救すくはん事ことを論ろんじて止やまず某幼いせけなくして父ちちの膝ひざを枕まくらとし或あるひは寢いねまた覺さめて其言そのことを聞きく然しかれども其故そのゆゑよし通つうじがたしなれども自おのづから其中そのうちに成長せいちやうなせし故某ゆゑが性せいとなりて終つひにさまぐの學まなびを好このみ貧者病者ひんじやびやうじやおい老おいたる者ものを助たすげんと思おもふ心又止時こころまたやむときなしなれども若年じやくねんの頃ころは色いろに迷まよひ強氣がうきにして人ひとに劣おとる事ことを嫌きらひて迷まよひ惱なやめりまかしなむら父ちちが志し

け習ならひ性せいこなり一日も忘わするゝ事ことなく諸國しよこくを遍歴へんれきし
 て神儒佛しんじゆぶつの道みちに達たつしたる大徳だいとくの人ひとを尋たづねて教をしへを受うけ其
 説せつを聞きくまかれども少しも心こころ安やすからず身み治なまらず
 貧ひんを免まぬがれず九族きうぞく睦むつまじからず兄弟けいていみな安やすき事ことな
 し某誠まことに天てんになげき地ちにかなしみ我心わがこころの悪あしく身みの
 つごめの勤つとまらず惰慢だまんにして愼つとみ守まもる事ことあたはず
 嗚呼あいか悲かなしきかな如斯かくのごとくにして年月ねんげつを送おくるば老おいに至いた
 るまで父ちちの志こころざしを繼事つぐことならじと常つねにかなしむ事こと久ひさ

南北は京都
 に住みし觀
 相家の達士
 なり

しこゝに伊勢國いせのくにに水野みづの南北なんぼくなる者もの大神宮だいじんぐうへ百日の
 間あひだ日に參まゐをなすに遇あひて初はじめて相法さうぼうの説せつをきゝ勸善懲くわんぜんちやう
 惡あくの道みちを聞きき大おほいに其教そのをしへの難有事ありがたきことを知しりて京都きやうとの
 宿しゆくしよ所しよに至いたりて奴弟子やつこでしこなり是これを學まなぶに只ただ籠食たうそじき少せう
 食しよくにして籠服そふくを着きる事ことのみを教をしふはじめの程ほどは勤つとめ
 がたく又如斯かくのごとくの事ことを勤つとめたりこもなごか妙所めうしよに至いた
 る事ことあらんやと思おもへ共師命ごしめいなるが故ゆゑに麥むぎの熟なま一ひと椀わん
 を一度いちどの食しよくと定め一日いちにちに麥むぎ一合五勺いちがうごしやくを以もつて食たべし

菜大根の外さまぐの物を食せず息を臍下に練つ
 め朝はこく起て身に勤め覺なき水を汲み薪を拵
 へ奴僕の業を勤め日々に清水寺音羽の瀧にかゝり
 夜は薄き蒲團に身をくるみて勤め難く凌ぎ難きを
 半年ばかり勤めけるに不思議や其利益を得る事あ
 りまづ飮食をなして腹中よろしきを覺え精神健
 にして惰慢の心自と止み美食を求る心なく麓服
 にして美服を求る心なく住居の美を好まず心自

ら安く貧の思ひ失せて心福々しく身を慎み禁む
 る事なし易く父母の恩師の恩の尊き事を知る猶
 萬病は心配苦勞をなし七情に破れ又は美食過食
 惰慢にして身を動さざるがゆゑにおこる事を知る
 其後白川殿の御門に入て神道の御教を學びていよ
 く其事を辨へこれに依て常に人に少食麓食麓
 服を勧め身體を動し正直を元として三種の御祓
 を唱へ候へば病苦をのがれ自ら貧を免れ心自

安く正しく身治り九族自ら睦まじこて教へ諭
 し申候又某が宅に無祿にして多くの人を養ふ事は
 富貴にして病苦ある者又は子孫身持あしくして家
 を乱し九族に見放されし者も三種の祓を唱へ神明
 に祈願をこめ鹿食鹿服をなして日々に歩行をはこ
 び教を受候へば病は快きを覺ゆ心も安く自か
 ら身治るを以て九族喜び神明へ初穂米又は初穂料
 を供へ候を某が身に附ざるやうに心かけ鹿食鹿服

を着し貧にして學び難く又は病に苦惱を受世渡り
 成難き者を助けて教るに祓の修行を以てし神
 明の利益を受誠の人に成給へこ諭候なり夫故食
 祿を貯る事無して其日々に世を送るなり然れ
 ども神明の加護にて今日まで米錢に盡る事なく又
 貯る事なし家内の暮しも某は存ぜず候て唯日夜
 神明の威徳を喜び天下泰平にして君恩の廣大な
 るを仰ぎ三種の祓ひを唱へ候て此御惠の御禮申上

候事に候

仁義禮智信

十六代帝 應神天皇
御宇漢學 渡る三十
三帝 欽明天皇
御宇佛教 渡る

問曰其許文字によらず書物をも讀せず仁義禮智信
の五常の道を解かず何によりて人に教へたまふや
答曰文字により書物により仁義禮智信の五常の道
を教ふるはこれ唐國の教にて皇國の教にあらず
勿躰なくも天照大御神は皇御孫瓊々杵尊に安國の
法を傳へ給ふ時に御鏡と玉と劍との三品を以て

古傳三段國
依第一沼矛
第二御頸
第三寶鏡
珠之玉

傳へ給ふ是三種の神器にて皇國の御寶國家を治
る教也

天照大神手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝
之曰吾兒視此寶鏡當猶視吾可下與同
床共殿以爲齋鏡上天祚之隆當與
天壤無窮上矣

此御言棄は御鏡を以て御神體とし齋さまつらば輩
原の中津國を平げく安げく御子孫天地と共に久し

御繁榮遊ごはんえいあそびされるこの御傳みつたへなり其祭りそのまつかたによ
 りて國家こくがを治なむるが皇國くわうこくの御教みをしへなり又天照大御またあまてらすおほみ
 神天かみあめの岩戸開いはさびらきのこき神樂かぐらを舞給まひたまふ是身これみを修をさめ家を
 齊さいのふる御教みをしへなり此故このゆゑに某人ひたを教をしふるに神拜じんばいの事ことを
 教をしへて朝暮あすけ祈念きねんせしむるに三種さんしゆの祓はらひ中臣祓なかつひを唱
 へさせ又太鼓またたいこを打鈴うちすずをふり幣帛ぬさを持もちて神樂かぐらを勤つとむ
 此法このはふさひのふ調みれば身安みやすく家齊いへさひ子孫しそん長久ちやうきうにして睦むつま
 しく榮さかえさかふる事疑ことうたがひ有あるべからず是神德これしんとくのなさ

しむる處ところなり某其道そのみちを悉ことごとくく得うるにあらざれども
 神職しんしよくの身みなれば朝暮あすけ怠おこたりなく勤つとめ候ゆる故ゆゑ其利益そのりやくに
 よりて心安こゝろやすく親族睦しんぞくむつましく猶世間なほせけんの家いへにては親子おやこ
 差向さしむかひにて其中そのなかに嫁よめなど娶めとり候ゆるへばはや家内睦かないむつまし
 きの意いを失うしなひ心安こゝろやすからざる者ものまゝあり某いへが家いへに
 は病者びやうじやまた又は貧ひんにしてたつきなき者もの親族しんぞくに見捨みすてられ
 し者もの皆多みなおほく集あつまり居をれども其睦そのむつまじき事水魚ことすゐぎよの如ごとく
 世間せけんの父子ふしと雖いへども及およばざるの睦むつまじき也世なりよの人の

知る所なり是全く某が治め守るにあらず神明の
 御傳神拜の式神樂の法の尊きが故なり何ぞ我不徳
 不才を以てかゝる事の成べきやみな是皇國の傳の
 尊き故なり我家に來り此有様を見るもの皆々法の
 尊きを喜びて門に入て學ぶものなりかゝる尊き
 御教のある神國に生れて其教を知らず唐國の學び
 又は異國の教など斗り尊きやう思ひ給ふ人々は
 情なき御事なりわれかゝる尊き教を人にもまら

せ一村をも睦しく人々喜び樂み公儀の御惠に
 預り天下泰平の尊きを喜び御恩をよろこばん
 事をねがふのみ

水魚の交

問曰其許家内九族門人水魚の交を爲すこ申さる
 事餘り大言にあらずやまた慢心ならずや

答曰御尤の御不審に御座候前にも申通り元惡き
 志の者斗り集り居申候然るに神明の御教ゆゑ

睦むつましき事は能世よくよの人の知る所ところなり此度御奉行所より書物差出候様被仰付候に付某事有難く恐入候事に奉存候間精進潔齋致し神明の御宮へ籠り相認候へば家内の男女愚なる婦女子にいたるまで一同或は水をあび齋し或は斷食し鹽を斷ち他にある門人も又斯の如くし尙隼人なる者法の爲に去冬牢中に死すこいへごも其妻子うらむる事なく我に仕ふる事彌誠を以てす是水魚の交

にあらずや是全く某が徳に非ず神明の法の尊きがなす所なり此神拜の式神樂の法を傳へ得る者あらば愚こいへごも又斯の如く一家の主知らば自から一家治り一國の主知らば一國自ら治る嗚呼尊きかな有難きかな天照大神の邇々杵尊に傳へ給ふ三種の神寶の御傳神明の御教へ傳を此國に生れて知らずして苦惱に沈む事のかなしさよ

神拜式

問曰何をか神拜の式何をか神樂といふや

答曰神拜の式の事は白川殿御傳授の事にて某など

御話申上候事にはこれなく只一通を申候へば神

を拜し候事の致方にて御座候然れども世間に神を

拜するの三種の祓中臣祓を唱へ候へども拜む

心が違ひ申候其故は世間に拜み候者の心の中に

何をねがひ申候と存候へばわづかの初穂賽錢を備

へ家内安全息災延命武運長久など祈り又其上に愚

痴貪慾の者は立身出世位を増し祿を増し金銀の

手に入候様又は町人などは商繁昌利分澤山にあ

る様よき儲口をねがふ其外我心に思ふ儘の貪慾

言語に申難く人には語れぬ程の邪事まで祈り又

其上何の品を納め何の品を建立仕候間この願ひを

御聞下されなど願ふ者のみなり淺ましき事なとず

や神は非禮を受給はず又貪慾の心を悪む我立身す

るには上たる役人死亡するか又は失策か致さねば

立身成りつしんなりがたし我わが禄ろくを増ますには人ひとの禄ろくを減げん少せうせねば已おのれ
 が禄ろく増ますさず我われに金銀きんぎょ多おほく手てに入いらば人ひとの金銀きんぎょを失うしなふ
 これを顧かへりみず神かみに祈いのるは人ひとを調てう伏ぶくするに等ひきしきか又
 何なにの品しな何なにの建こん立り奉ほう納なふ仕しるに依よりてこの願ねがを叶かなへ給たまへ
 なご、申まひ事なひは賄まひ賂なひにあらずや人にん間げんの教をにすらか、
 る事きを嫌いまし禁なむ何なんぞ神しん明めいこれを受う給たまふべきや然しかれ
 ども世よの人ひと此この事ことを止やめれば神かみに参まう詣でて祈いのる事ことなし
 笑わらふべきの甚はなばだしはなきなり家いへを治なめ國くにを修なむる者もの斯かくの

如ごときの心こころ懸がけにて我われふかれ人ひとあしかれなご思おぼ召しめ心こころ
 にて家いへも國くにも修なむるの道だう理りなし又また其そのねがひなき者ものは
 氏うぢ神がみの先せん祖ぞへも参さん詣けいをいたさず産うぶ土すな鎮ちん守じゆをも拜はいせ
 ず嗚あ呼い何なんといふ事ことぞや知しらぬ天てん竺ぢく唐から國くにの佛ほとけなどは
 拜をがみ廻まれども我わが先せん祖ぞの宮みやへも参まりまざるは迷まよひの甚まよ
 きものなり此かくの如ごとき末まつ世せの人ひと心こころおこるへぬれど
 天てん照せう皇わう大だい神じん宮ぐう東とう照せう宮ぐう、この兩り御やう神おんへかゝる不ふ淨じやう貪さん
 慾よく邪よこをねがふものあるを聞きかず参さん詣けいの者もの御おん德とくを

仰あふぎ御おん惠めぐみを難ありがたく有奉存候へば御禮おんれいに參詣仕さんけいのみな
 り是人心これひこころあしく候へども神德しんとくの廣大くわうだいにして不淨ふじやう
 を近ちかづけ給たまはざるが故也某人ゆゑなりに教をしふるに日本にほんの大たい
 祖天照大神宮天下泰平てんかたいへいの基もとをなし給たまふ東照宮の御ご
 威德いさく廣大御惠くわうだいおんめぐみの内うちにかく安やすく住居仕候御禮おんれい并ひらに
 家々いへの祖神そじんに御禮おんれい申上天下泰平家内安全てんかたいへいに夜よの守まも
 り日ひの守まもりに護まもり幸さきはひ給たまふあら有難ありがたや嬉うれしや國恩こくおん
 主恩親しゅおんおやの恩師おんしの恩おんなればこそたすけ助たすかる此身このみよ

と喜よろこび謠うたひ舞遊まいあそぶ是神拜これじんばいの心こころも神樂かぐらの心こころも
 云いふ猶式なほしきの事は白川伯王殿御家の傳おんいへなれば顯あらはに
 は申まをがたく某其心そのこころを傳つたへて其式そのしきを傳つたへず

籠食籠服

問日其許籠食籠服そのももそじきをもつて門人もんじんに教をしへ家居いへぬも美びを
 好このまぬやう申まをされ候へども世間せけんの人々中々ひさぐな以もちて是
 を用もちひず鬼角さかく驕おごりに募つのり教をしを受うけざる者多ものおほし志こころかる
 に其許門人能そのもももんじんよくこれを用もちひ守まもる者多ものおほし是何故これなにゆゑなるや

答曰これ天照大神の御傳にふるが故にて全く私
 の事にあらず物には本こそ末こあり又始あり終あ
 り其本を去りてなす時はなし易く其末に依てなす
 時は成難し今末により給ふ故人々苦しみ罪を犯す
 者多くして事爲しがたし元神道は質素にして人の
 風俗正直を本とす

神道は白木造りに茅の屋根簀の子のねだに建し
 御鏡

此歌の心にて知るべし質素を守り風俗の善きに
 いたる家を修め國を治るの本なり是を行ふは神
 拜の式の傳なり其傳は白川殿御家の御傳にて御
 門人は是を受るなり故に某など申べき事ならず然れ
 ども世間神職の者皆その式を受るこ雖も其心を
 去らず故に其事行れず誠に尊き神の傳なり其
 門に入て其式を受給はゞ其心は申上ぐべく候

金銀融通

問曰今世の中は金銀融通の事あしくいづれも獨ひざりび
 こり貴たふさきも賤いやしきも是これに差支さしつかへ風俗ふうぞくもあしく成行なりゆくや
 う覺おぼは候そのもと其許かないには家内かないの暮くらしも知しらず金銀きんぐをも求もとめず
 貯置たくはへおくこと事こともなく入用いりようの節せつは差支さしつかふる事ことなし世よ
 の人ひと之これを怪あやしむ何なにれ故ゆゑなるや

答曰誠まことに有難ありがたき御尋おんたづねなり今いまの世よは天下てんか泰平たいへい國家こくが
 安穩あんおんにして更さらに憂うれふる事ことなし然しかるにたゞ金銀融通きんぐつうの
 みに貴たふさきも賤いやしきも祿ろくあるも祿ろくなきも心こころを苦くるしめ禮れい

をかき義理ぎりをかき風俗ふうぞくを賤いやしうす故ゆゑに某ちいまがねが父真鐵ちいまがねこ
 れを憂うれふる事こと數年すうねん其道そのみちを求もとむ事こと又年久またとしひさし前まへにも申まへ
 す如ごとく終つひに憂うれひて病やまひとなり十ヶ年じゅうねんの内思うちおもひくて
 終つひに其事そのことを知る然しかれども老年らうねんに及びおよび歳とし七十五才しちごじゅうごさいそ
 の事ことを行おこなふ事ことあたはず某おのこに遺言いごんして曰いはく汝なむち此法このはふ
 を能熟よくじゆくし能學よくまなび家いへを齊ととのへよ若用もしもちふる人ひとあらば其その
 法はふを惜をしまず傳つたへよ家いへの主ぬしこれこれを去いつがば一家いっか安やすく一國いっこく
 の主ぬし之これを知らしば一國いっこくの民安たみやすからむこれ神道しんだうの御教みをしへ

磐榮とは口
訣に天津磐境
は堅固磐榮
榮の言所
謂清明正
直を以て
堅固磐榮
の正理を
たし天孫
を守護し
玉ふ云々
とあり

傳むべし用ふべし磐榮の法なりこて傳へ若し此
志を失ひなば吾子孫にあらず縦へ錦を着て高
位高官に昇ることも不孝の罪廣大なり又之を學び
人に傳へて國家を安んぜば身は道路に死すことも吾
子孫なりと申たり某不肖なる者なれども父が志を
思ひくゝて年久し今頌白の歳に至る又空しくして
終らんか是某が憂ひ也

息の教

問曰其許神拜の式神樂をもつて根元とし給ふや又
息の教をもちて先とし給ふや

答曰神拜の式は天照大神の御傳にて白川殿御傳な
り某も此御傳にあづかるが故に神道の教を得たり
故に神職たり主客をいへば式は主たり息は客たり
又息の事は諸藝にも入用なり息合あしく腹内あ
しき時は其式を得ることも業ならず然らば息は客た
り然れども世間に其式を受る者多しと雖も其心

をしらず故に息の事を教ふ弓馬鎗劍の術と雖も
 又此の如し譬ば木馬を教るは式なり其生馬に乗
 得る者は息合にて心のすゑ所なり何事も皆此心
 あり三種の祓は内清淨なり其得る所にしていづ
 れよりも入なり然れども式を以て先とし心を後と
 す式は傳を得る時は得易く心は得難し又傳へな
 き時は心は得易く式は得難し學ぶ者心を用ふべ
 し

禮 樂

問曰神拜の式と神樂と此二にて家も國も治るや
 うに申され候いよく是にて治り候や仁義禮智信
 の教を立てすら行はれず覺束なき事なり

答曰御不審御尤の御事に御座候是は神國の傳な
 り仁義は唐國の傳なり唐國の傳を學びたまふ人
 にはかく思ひ玉ふも道理なり志かし唐土の聖人も
 禮樂を以て國家を治るこいへり是大道なり禮と

論語序に
適レ周問ニ禮
於老子ニ既
進而弟子益

いふは宗廟の禮是禮の元なり孔子も老子に問所なり是神國の傳の式なり樂といふは唐國にては樂記亡びて其傳絶たりといへり論語にも

論語卷四陽貨篇

禮云禮云玉帛云乎哉樂云樂云鐘鼓云乎哉

しからば笙簧笛を吹ばかりが樂にあらざるを思ふべし神國の傳へ神樂は其傳へ神代の卷に出たり又其心を得る者少し某其神樂の業は能學ぶ事なし然れども其古の法による孔子もこれをいふ

先進於ニ禮樂一野人也 後進於ニ禮樂一君子也 如用之 吾從ニ 先進一

某が神拜の式神樂は古に據るゆる姿甚見惡し人之を異み笑ふこれ我愁ひなり能其事に通ずるものに逢て學ばむ事をねがふものなり

正直

問曰神道は正直を元とすこ承はる正直なる心といふは邪ならぬをいふなるべし何を以て邪

と正ただしきを別わかつや又直またすなほといふはいかなるを直すなほとす
るや

答曰正ただしきといふは皇國くわうこくの祖神そじん天照大神あまてらすおほかみの御教みをしへを
元もととし其外そのほか諸善神しよぜんじんの傳つたへ給たまへる教をしへを正ただしきと申まな
り直すなほといふは其教そのをしへにもとらず守り守りて疑うたがひの
なきを直すなほといふなり此疑このうたがひのなきを信心しんじんといふな
り又信心またしんじんを誠まこととも申まなり

天照大神手持あまてらすおほかみ寶鏡たまかみ授たまふ天忍穗耳尊あまの忍穂耳尊而祝之曰吾兒

視みニ此寶鏡このたまかみ一當ひとと猶視またみレ一吾可われ下くだ與同床共殿ひとと以もつ爲齋鏡いそかみ上
寶祚たから之隆たか當あた下くだ與天壤あまのつち一無窮なげ上あ矣

天照皇大神宮寶勅

吾われもろくの青人草あなひさぐさい偽いつはりばかりて譬たとへば吉よしと思おもふこ
も必ず天の命あめのみことのいかりをうけて根の國ねのくににおもむか
ん正ただしき心こころをもちてまさあしに悪あしくとも必ず天の神あめのかみの
惠めぐみあらん

もろくの生人いくひとら天あめにさかふ時は道みちなく地つちにさか

へば其^{そのさいはひ}幸^ななし其^{そのもと}元^{には}はなれ根^ねの國^{くに}に入^{いり}落^{おち}んぞ重^{かさ}
 ねて心^{こころ}を天^{あめ}地^{つち}に等^{ひきし}くして思^{おも}ひを風^{かぜ}雲^{くも}にのせて道^{みち}
 にした^がふの本^{もと}こし神^{かみ}を守^{まも}るの要^{かなめ}こそよ萬^{よろづ}のく
 だぐしき事^{こと}を拂^{はら}ひ捨^{すて}て一^{ひきつ}心の定^{さだま}れる法^{のり}を尋^{たづ}ね
 て天^{あめ}の神^{かみ}の命^{おほせ}にかなへ神^{かみ}の心^{こころ}にかなへ
 もろくの生^{いく}人^{ひさら}等^{あめつち}天地^{したかひ}に隨^たま玉^{たま}の緒^ををつぎ 皇^{すめら}
 祖^{みおや}をまつり心^{こころ}の法^{のり}を正^たしくし其^{その}みなもこの根^ねを深^{ふか}
 くし皇^{みおや}祖^{かみ}の神^{かみ}をうやまひ四^よ方^もの國^{くに}をした^がへて天^{あめ}

の位^{くらゐ}の尊^{たふさ}き事^{こと}を見^みてそのわざを天^{あめ}の下^{した}にひろむ
 べし

祭神
天御影命

三^み上^{かみ}大神^{かみ}々^々託^と

常^{つね}に天^{あめ}の下^{した}の諸^{もろ}人^{びさ}に正^たしく直^{なほ}き心^{こころ}をしらしめんこ
 思^{おも}ふ者^{もの}は神^{しん}明^{めい}これ^をよろこびて其^{その}名^なを天^{あめ}の下^{した}にあ
 らはします幸^{さいはひ}は子^し孫^{そん}にあまる譬^{たとへ}ばまがれる者^{もの}の
 一^{いつ}旦^{たん}人^{ひさ}のよかる事^{こと}ありとも神^{しん}明^{めい}かれをうばひてつ
 ぎなかるべし

祭神
金山彦命

南宮大神々託

世の人の人をよく誘ひすくふものは天の神地の
 神につげてかれに報るにつきざるの幸をあたへ
 給へり人の人をさかしらいやしめぬる者には天地
 の神必ず災をあたふるものなり善不善とは
 神のよくして國家を守るの要なり

祭神
素盞鳴命

新羅大神々託

総ての人心直く正しき其身には鬼神もこれを傾
 けず水火もをかしえず金石も是が爲に隨ひ利亦も
 切る、事なしと思ふべし諸人よ直き心の操をか
 たむくる事なかれ

此外有難く尊き御教の傳へ數多けれど先其一つ二
 つをこゝにのするかゝる御教を少しも疑ひ思ふ心
 なく忘るゝ事なく守りまもるを以て正く直なる
 心こそするなり神の御傳も辨へず只我心にてよし
 あしを辨へし様に覺えさかしらしき者を千早振神

さて悪き心あし こころを教へ給ふたまゆゑに自然しぜんと慢心まんしん起り又驕またおご
 りの心こころおこりて荒振神あらぶるかみにさそはれ一旦いつたんは勢盛いきほひさかん
 なりといへども後必のちかならず災わざはひにあひ又またはおそろへ子
 孫そんほろぶるものなり世々よゝゝの人ひとを見るに皆斯みなかくの如ごとし
 猶今なほいまの世よにもたがはじ然しからば尊たふさき神かみの御傳みつたへなくて
 は永ながく榮さかえさかふる事ことあるべからず恐おそれ慎つしむべき
 事ことなり

正直なる者

問日神かみ しやうじきは正直しやうじきなる者ものを守護しゆごしたまふと聞きく然しかるに
 我學友わががくいうなるもの若年じやくねんより正直しやうじきにして父母ふぼに孝かうを
 つくし人ひとごまじはりて私わたくしなく聖賢せいけんの道みちを人ひとに教を
 へ諭さとす然しかるに度々たびぐくわなん火難かたにあひ又子またこ多く生うまるゝとい
 へども成長せいちやうする事ことなくたまく無難ぶなんに生立おひたちし子は
 不孝ふかうなり今老年いまちうねんに至いたりて跡相續あとさうぞくするものなし不仕ふし
 合あはせなる者ものなり神かみは善人ぜんにんを加護かごし給たまふといへるは覺おぼ
 束つかなき事ことなり其故そのゆゑよしをさこし給たまへ

○正直なる者

五十六

祭神
大職冠内大
臣藤原鎌足
公
別格官幣社

答曰御不審御尤なる事にて候藤原氏の祖神多武
峰大神の曰く唐土の書を見ならひ西天の教を修
し得て我日本の神明のみこのりを見て淺はかに
思はん者をば我其家にいたりて或はみどり兒を失
ひ或は重き病をさづけ其隨ふものを退け或は
火乱神をして焼亡さん西天震旦の教をきらへる
にはあらず本をすて、末をこる事をいふなり佛法
儒道も吾神道の潤色こそせんは最このむ所なり

祭神
健雷命

神明の掟をして儒佛の潤色こそする事なかれ
建石勝大神々託

諸人の我神國を忘れて父母の恵を辨へず本をた
ちて枝の言葉の繁きにまよひて年より年に月より
月に日より日に時より時に迷ひぬるぞくるしき吾
神明の直き心の外に思ふべき事更になし

祭神
速素盞鳴命

杵築大社神々託

益人が吾神國の掟を守らで外に心をうつしなば

○正直なる者

五十七

神明しんめいの仇あたなれば我眷屬わがけんぞくの神かみをつかはし其玉そのたまの緒なを
 うばひ取さらむ諸もろくの神かみを祭まつらん到我われをまづ先さにせぬ
 もろ人ひとのねがひはよもとげさせじとおもふ

住吉座荒御魂大神々託

祭神

表筒男命

中筒男命

底筒男命

我國わがくにの人ひとは我神わがかみの子こなり親おやの教をしへを失うしなひてあらぬ
 かたの教をしへに従したがふは我子わがこにあらじ我子わがこにあつねば
 彼守かれまもるによしなし是天照尊これあまてらすみことの教をしへなり我思わがおもふ益人ますひと
 よ保たもちたもて

城山大神々託

祭神

倭武尊の王

子

神櫛別命

諸人もろひとが吾神明わがしんめいの教をしへを失うしなひて他の國法こくほふを崇あがめあら
 ぬ思おもひに身みをやつしぬる也なに今いまの世よには人ひとの善よし
 悪あしをわくるに其善悪そのよしあしをばいはず貧ひんと福ふくとの二ふたつを
 以もつて人ひとを採さゆゑに悪人あくにんは日ひに月つきに多おほく善人ぜんにんは日ひ
 月に隠かくれ邪よこしまはいよくあつはれ法ほふは法ほふなきに無む
 理りは理りに勝かち神明しんめいのゆゑ人間にんげんにあるは其性そのせいまこと
 に有ありがた難たきもいやしきがしたに立たち王法わうほふおころへ家か

法正しきはいやしきにくだる歎きて我常に是を思ふ皇祖も是を慨きおぼしける故今より後必其性正き者國の司になさんこ曰なり

此御神託を以て考るにその人神明の御心に叶ふまじ能々御考あるべし

金銀米錢

問曰其許金銀米錢を貯ふる心なく寒暑の手當をなす事なくも神の道を學び得る時は差支ふる事な

しこ教へ給ふ世の人下々は申に及ばず貴人高位にもに其時節の手當金銀の事に心を用ひくても猶たらず苦む所なり然るに神道の教を學びたりこて其日くの家内の暮に差支るやうに成行ば家も治らず又亡るに至らんか古人も三年にして一年の貯を殘すといへる事ありと聞く此事いかに

答曰

祭神 八重事代主 神

三嶋大神々託

貴賤きせんもなく家毎いえごとに兩宮りやうぐうおはしますなり此この兩宮りやうぐうに能よくつかへて常つねによるこびの鈴すずの音ね高く出入いでいる人の足あしの端はに怨うらむる心こころなくあがめて參詣まうでぬるならば天あめよりは寶たからの雨あめをふらし地つちよりは一切いっさいの寶たからわき出し天あめの神かみも地つちの神かみも日夜にちやに影向えいがふのひまなく願ねがふ所ひこつ一ひととして叶かなはずさいふ事ことあるべからず

此御神託このごしんたくにて御考おんかんがへあるべし某生れ付愚智短才うま つきぐちたんさいの者ものにて不學ふがくなれども神職しんしよくなるむ故ゆゑに神かみの教をしへを守まも

り朝暮てうぼ怠おこたりなく祓はらひを唱となへ神樂かぐらを勤つとめて神明しんめいに事つかへ奉たてまつるが故ゆゑに金銀米錢きんぎょべいせんを貯たくはふる事ことなく衣類いるいの心當こころあてもなけれど其時節そのじせつくに寒暑かんしよをしのぐに足たれりあたふさく尊たふさきかな有難ありがたきかな神明しんめいの御教みをしへかゝる事ことの有あるを多おほくの人ひとにも知しらしめて人ひとの心こころを安やすからしめん事ことをねがふのみ

神 職

問曰そのもと其許しんしよくは神職しんしよくゆゑ祓はらひを唱となへ神樂かぐらを勤つとめめ神明しんめいに

事へ給はゞ日々の暮方にも差支なきは尤のや
 うにも存じられ候武家又は百姓町人などは中
 く神道の修行を致候て差支なきご申事はあるま
 じく候此事如何に候や

答曰神道ご申事は君たる者は萬民を撫育し恵み臣
 たる者は君に身命を惜まず仕へ百姓は五穀野菜を
 作り出して身の力を惜まず町人は其所にあり餘
 れる品を無き所へ送り細工職人のこしらへ出す

物を集め置いて入用の人に賣なし斯の如くにして神
 明に仕奉なり是何故なれば皆神明の勅命なれば
 なり然るを私の世渡のやうに思ひて武家は官祿
 の進まむ事を思ひ農工商ごもに利の多からん事の
 みおもひて私の慾にふけりて我身の勝手ばかり
 思ひて世の人の助けを思はざるが故に神明の御心
 に叶はずして心中やすき事なく身に苦惱をうけ人
 をなやますものなり唐の書にも

まなぶやろくそのうちにある
 學也祿在ニ其中矣 君子憂レ道 不レ憂レ貧
 ご教へ給ふあゝ世の人の迷へるの甚しきなり今
 より其心を捨て神明の御教を受天地の御恩を思召
 て仕へ給ふべし

祓と神樂

問曰其許は祓を唱へ神樂舞の事のみ尊きやう申
 され候其故由を申したまへ

答曰

祭神
大吉備彦神

吉備津彦大神々託

あまてらすかみ をしへ ばらひ ひまたび
 天照神の教の祓を一度はらへば百日の災難を
 のがれ百度の祭文は千日の科をすつる千世萬歳を
 へてても天の神の恵はつきじ生々世々に貴は天
 地の恩仰ぎても猶あまりあるは神徳に越る事なし
 此御神託にて御考なさるべく候某全く私の事
 を申さず神樂の事は神代の巻に出たり天照大神天
 の岩戸に入給ふ時八百萬神等神樂を舞給ふに天

○祓と神樂

照大神御出現のよしあきらげし

妻 子

問曰其許妻子の事をば思ひ給はずや家相續して榮
えるこそ先祖への孝なるべきに年五十にあまれる
に子孫へゆづる祿もなく又貯もなく其日く
世を送り給ふは子孫を思ひ給ふ慈悲のなきか末を
ばかりたまふ思慮のあらざるや其故いかに

答曰世人財寶を集め又は祿を求めて子孫に譲るこ

雖も財寶は散じ易く祿は失ひ易し猶財寶あるが

ゆゑに子孫財寶の爲に兄弟相奪ひ合て中をたがへ

九族相争ふ者多し祿あるが故に子孫身持惰弱にし

て驕に長じ上の御惠を思ひ下を慙の心なく

世の人を苦まむる者多し某子孫を思ふ事人にこほ

たり故に老て子なくなつたつきなく又は病者幼稚し

て父母なき者生れつき惰慢にして事を勤め難きも

の不孝にして九族に捨られし者若き血氣にまかせ

色いろに迷まよひ酒さけに乱みだれて身みを修をさむる事ことならざる者ものをあ
 はれに思おもひて助たすけ養やしなひ置おき神明しんめいの御教みをしへをもちて諭さとし
 安やすからしめん事を願ねがふ斯かくの如ごとくならば天地あめつちの御心みこころ
 にも適かなひ子孫しそんも自おのづから榮さかえはべらんと思おもふなり財さい
 寶ほうを以もちて寶たからこそせんや神明しんめいの御傳ごでんこそ眞まことの寶たからなれ

祭神
應神天皇

八幡宮神託

益人ますひこよ乞食こつじきらい癩い蟻ぎ螻ろうに至いたるまで深ふかくあはれむべし惠めぐみ
 あはれみの廣ひろきものは玉たまの緒なごり限かぎなく永ながく子孫しそん鶴つるの

祭神
天羽槌稚命

羽はをひろげしが如ごとく天あめの神かみの直なほき心こころにも自おのづから
 なるべし慈悲じひの海うみ廣ひろければ天そらの月つきかげをうつせり
 倭文しごり大神たみ々々託たく

諸人もろひこの世よの人ひとの助たすけならん事ことをつねに願ねがひもし學まな
 びもしあづん者ものをば吾われつねに神力じんりきを勵ほげまして日ひの本もと
 の神寶かんだからこそせんいたづらに世よの人ひとの國くにの産さんを費つひやさ
 んをば必かならずわれ我われかれをしてそむけて失うしなはん

此御言葉このみことばを以もつて我子孫わがしそんを思おもふ事ことを察さつし給たまふべし

天地の心

問曰天の心に叶ひ地の心に叶ふご申す事はいか
なるを天の心ご申候や地の心ご申候や

答曰天の心ご申候は天照ます大神の御心に叶ふ
をいふなり地の心ご申は大國主尊の御心に叶
ふを申すなり天照大神は天の下の蒼生を子の如
く思召て愛み恵給ふをいふなり

第十四代帝

仲哀天皇詔に

人の主としては萬民の心をもつて心とし萬
民の家をもて吾家とし萬民の衣服をもて吾衣と
して已なきを人の主ごはいふなり

第五十二代帝

嵯峨天皇詔に

朕より後の人の主に志めすなり國土に邪氣者を
罪せんより萬民のまづしき事をばからひて苦
を救へ悪人は消失なん諸人のあまき振舞をなすは
普く今日を送りかねたるよりおこるなり國家に悪

人にんこそ源みなもとなし只天地ただあめつちの養やしなひをふらで空むなしく世よを渡わたるに有あるものなり愚おろかに賤いやしきもの、直なほき心こころなきは理ことわりなり直なほかるべき人ひとの主あるじの直なほからぬ故ゆゑなるべし大國おほくにぬしのみこ主み尊やまがは身みに入坂やまがの瓊たまをかけ給たまひて道みちの街ちまたにかくれたまふて人ひとの志こころらぬやうに深ふかく幽かくれまして罪科つみごとつくる者ものをあはれみ給たまひて表おもてに顯あらはれざるやうに救すくひ助たすけたまふ

竹生嶋大神々託

都久夫須磨
神社
祭神
浅井嗶比命

我常われつねに住所すむところは西方さいほうにあり其心そのこころはつねに東南さうなんにかよはしぬ虚空こくうのうちうちに身みをかくし大地だいちのうちうちに身みを隠かくして其聲そのこゑを妙たへにして其音そのねをあらはす一切いっさいの寶たからをわきまへ心こころの直なほき者ものに世財たからを與あたへ神佛しんぶつの旦越だんをつこなす大慈悲だいじひのゆゑに邪見じゃけんの人ひとたりと雖いへども我われをたのまば世財たからを與あたへて其邪そのよこしまなる心こころをして正路しやうろに引ひきいれしむまして正ただしき人ひとに於おいてをや

此御神託このごしんたくの越おしむきを能よくく々御考おんかんがへ御覽候ごらんへ誠まことに人ひとの

主たる者の御心ばせ有難き御事と奉存候古歌に
聞毎に君のめぐみの深ければ

身もをしまじごおもひぬるかな

十種の神寶

●●●●●
十種神寶
生玉、足玉、
奥津鏡、邊
津鏡、十束
劔、道反玉、
死反玉、蛇
比禮、種々
物緒、

問曰神の御傳に十種の神寶と申事有之由 其中に
瀛都鏡 邊都鏡と申事有難き御事にて候趣に
承り候此儀御尋ね申度候

答曰十種の神寶と申事は天照大神の御傳にて深

き大事御座候由 承り中々以て某など委く申べ
き事には無御座候へごも御尋ねゆる瀛都鏡邊都鏡
の御教申上べく候先鏡と申す物は我姿をうつし
申候者にて我姿悪き時はあしく寫り善き時はよ
く寫り申候世の中多くの人の心を鏡とし我心の
姿の善悪が皆寫りてあると申たこへにて我心あ
しければ我向ふ程の人の心あしく我心よければ
向ふ人の心よく少も違ふ事なきものなりこの御

古歌に
我心鏡に
うつるも
のならば
さぞや姿
の見たく
かるらむ

○十種の神寶

七十八

教をしへにて其心そのこころ先さきより先うづつへ寫うつるものぞこの御教みをしへが邊都へつ鏡かみのいはれのよし故ゆゑに一家いつかの主心ぬしこころ正ただしき時ときは家か内ない皆みな正ただしく一國いつこくの主正ぬしたしければ一國いつこく皆みな正ただし定これみな
 已おのれにありて人ひとにあらざること申事まことにて御座候みまはせ唐からの書ふみ
 にも

大學右傳之
九章

一家いつか仁に一國いつこく興おこ仁に一家いつか讓やう一國いつこく興おこ讓やう一人いちにん
 貪たん戾れい一國いつこく作つく乱らん其機そのき如此かくのごとし此謂これをい一言いちげん償ごんごを事やぶり
 一人いちにん定にんく上に國な

ご申事このまことも此事このことかご存またられ候くんし又また君子おみは弓射やみが如ごとし的まさ
 をはづるれば已おのれの射方いのあしきを思おもふごあり何なに
 事ことも已おのれより出いでて彼かれになきものご知るべしこの御み
 教をしへなり已おのれを知り已おのれにかへるご申まことご大事だいじの學まなび
 に御座候みまはせ斯様かやうなる事ことは智賢者ちけんしや皆みなよく知る所しなれど
 も身みに行おこなふもの少すくなしたご心に覺おぼえ口くちに云いふのみ然しか
 るに神道しんだうの瀛都鏡邊津鏡うきつみかみへつみかみの傳つたへを傳つたへ得うる時ときは少せう
 々宛くづは誰たれにても其行そのおこなひ出來申候まこと年月心懸候としつきこころがけへば全まつた

○十種の神寶

七十九

く行得るにいたるなり是神の傳の尊が故なり

親族

問曰我親族多くして其上志あしき者のみ又普代の家來我まゝに成ゆき種々に教へ諭し又は法を以て糺し候へども行れずいかゝなすべきや

答曰人の風俗を直し世の風俗を變ずる事は甚以て難し古人も刑罰を以てすれば人怨み罪人多し法を以てすれば民苦みて只其法をまぬかれん事をの

み思ふて怖恐れて安かゝらず古人今人にも行ふ事を得ず誠にかたき事なり然れども皇國の傳への尊き事は某などの如き生れ付行届かざる者なれども親族もて餘し候様なる身持あしく風俗あしき者も某が家に來りて多く門人となり居ば半年一年皇國の教を受候へば段々直り申候是全く某が教へかた宜にあらず御傳の尊きが故なり譬ば水と油は交らぬものなれど其交る法の傳をうければ愚

の者ものと雖いへしも心安こころやすく交まじる様やうなるものにて其人そのひとの力ちからにあらず傳つたへの尊たふさきが故ゆゑなり其許誠そのまことの心こころにて家か内の者ものをあはれむ心こころあそば皇國みくにの御教みをしへを受うけたまひて九族きうぞくを安やすからしむべし是先祖これせんぞへの孝子孫かうしそんへの慈じ悲ひなり等閑なほざりの事ことにあらず深ふかく思おもひたまふべし

祝詞

問曰天津祝詞太諄辭あまつのりごふさのりごと申事まこといかなる事ことに候まをや

答曰此天津のりこのあまつとふふこのりのりとと申まをは中臣なかつみの祓はらひにこ

れを宣のらば天津神地都神御出現あまつかみくにつかみごしやうげんくだ下くだされ候まをて罪つみといふ罪科つみさかといふ科さかを祓はらひたまふふと申事まことにて神道しんたうの大事だいじなり不學愚智ふがくぐちの某ななどが申上候事まを及びおよびがたき義ぎに御座候へおんたづねとも御尋ひさしほりに付一通申上候天津祝詞おんたづねと申まをは天の徳あまのとくに乘のりり太諄辭あまのつかみと申事まことは地ちの徳とくに乘のりり候まをと申事まことにて天地あまのつちの氣けに乘のりり候まをと申事まことなり唐國からくににても天あまに則のつさる又は天地あまのつちの法のりなど申まをし又は天あまに從したがふ又は天あま命めいを知しるなど、申まをも是これを知しりて其命令そのめいれいに從したがふと申まを

○祝詞

事のやうに承はり候へども唐の學はまなばざれば
 去らず日本の教はのりご申候言葉にて乗法則
 いづれも通じ候事にて言葉の妙用言葉を以て傳
 ふるの教なり此意を古歌に

ながきよのこをのねふりのみなめさめ

なみのりふねのをこのよきかな

此心はながき世のこをきれむりの皆眼醒 浮世の
 悪き波にも船にのりたれば安く世を渡るご申事に

て此船は二こなく只一の靈の寶の船なり是に
 乗得ればすぐに神の則に叶ひ上の法に叶ふご申事
 なりふご申は日本の教の言葉の大事天地の氣のめ
 ぐりて留らず止事なきをいふねご申は根元を申
 にて木の根など申す意にて人の心の法命の根ご申
 事なり此船を神書に岩櫂船ご申たり磐櫂はさ
 かえ榮えて朽果ぬをいふなり又此歌は上より讀て
 も下より讀ても同じ歌なり貴人より知れば順なり

○祝詞

下人げにんより知しれば浮沈うきしづみの波なみにあふの心こころある妙言めうげんの
歌也うたなりまた歌うたに

葦原あしはらのしげれる中なかに立波たつなみを

乗得のりゆて嬉うれし磐椽いはくす棹すの舟ふね

ばせをの句くに祝詞のりことの妙めうをよみて

梅うめが香かにのつこ日ひの出でる山路やまぢかな

猶祝詞なほのりことの事ことは言語ごんごにつくしがたし神かみの傳つたへなり

神道唯一問答書書繼

信心得道

問曰しんぐさくたう信心得道しんぐさくたうと申事いは如何いかなる事に候まや

答曰しんぐさくたう信心得道しんぐさくたうと申事いは神明しんめいに御誓おんちかひを蒙かふむる事ことにて

御座候おんちかひ御誓おんちかひを蒙かふむると申事いは御約束おんやくそくを申上候まて間ま

違ちがひなき事ことにて御座候おんやくそく御約束おんやくそく申上候まてまぢがひ無な

き事ことは信心しんぐとて誠まことの心こころになし下くだされ心こころを安やすく

身みを安やすく家内かないやすく我住國わがすむくにを安やすくなし下くだされ生いきて

○信心得道

心中しんちゆうおもしろくたのし樂き事ばかりにてくる苦しくなんぎ難儀な
 る事ことのなきやうにみほろぶ身亡る時はたましひ靈をかみ神になしくだ下
 されじんつうじざい神通自在をなし候やうになりてねがひ願としてじやう成
 就じゆうせずいふ事なきやう様になしくた成下され候このおんやくそく御約束に
 てしんめい御座候おんかた神明のおんかた御方よりはおんやくそく御約束はおんかた御違へなされ
 ず候へわががたごもおんやくそく我方よりたが御約束をしんぐ違ふるゆゑにしんぐ信心ご
まう申すかみ神になるべきたね種もうしな失ひ申候

約 束

問日なに何をおやくそく御約束たがひ違ご申事にて御座候や

答日おやくそく御約束をたが違へ申候ご申事はあさゆふほらひ朝夕みな祓をかをしへ唱へ御教

のはふ法ををりくちやうもん折々おこた聽聞いたし候事おこた忘りなくいた致し申べき

をおこた忘りうちすておきぢちになりおやくそく打捨置申候をおんちかひ御約束御誓おんちかひにそ

むき申候ご申事にて御座候ごかくにしんぐ信心得道しんぐいた

し候ても今日こんにちのよわたり世渡にこゝろいそがこゝろいそがほかしく外ほかよりは

心こゝろをなやま惱しまたわがおも又我思こゝろひにて心こゝろをこゝろいそがくるしめ心こゝろいそが忙しく

忘おこた勝おこたにおやくそく相成御約束をしんぐたがへしんぐ信心ご申すふた二つふたもな

○約束

く三つもなく唯一つの神寶を失ひ申候事にて信心だに失はず御祓を唱へ聽聞候は、草木の種を植ゑ生そたら又小兒の月日さへたち候へば智恵つき育ち候やうに追々に誠のこゝろになり心も安く身もやすく家内も安く國もやすくなり申候事に間違なきを我はからひ思ひに迷ひて取失申候事に候元我等は迷ひの凡夫ゆる幾度もまよひて烹り勝になるべく候へども心附候は、神明へ心中に

て御詫申上又々御誓の如く御祓相勤め聽聞致候へば神は御慈悲深く候間御喜悅なされ御守りくだされ候事にて御座候一度御誓ひ御座候上は此方よりあらため候は、神明の方にて御心の變る事は有まじく候此かはらぬ御心ゆる神は誠の心にて神明ご申事に御座候かく御答へ申候も身にあま里有難き御事心にあま喜悅のなみだにくれ申候御信心御戴の御方々はおよるこびなさるべく候

法はふを辨わきまぬ人々ひとびとは金銀きんぎんを寶たからとし官祿くわんろくをたからご
 存候ぞんこうへごも失うしなひ候事こうじもこれあり又また金銀きんぎん官祿くわんろくにて
 心こころを安やすく身みをやすく家内かないを安やすく住居すまぬする國所くにどころを
 安やすく思おもひこして叶かなふご申事まうじはこれなく候こう金銀きんぎんは浮うき
 世よの寶たからにて神かみの寶たからには無これなく之その候こう能よく々ごち御聽聞ごちやうもんいたさ
 るべく候

旅立

問曰しんく信心得道しんくさくだうの上うへかゞは祓修はらひしゆぎやう行ぎやういたし聽聞ちやうもん忘おぼた

りなく候こうへば願ねがひとして成就じやうじう致いたし神通じんつう自在じざいをなし
 候事われご我等われらがやうに愚おろかなるものにても成就じやうじう候こうや

答曰かみ神かみの御誓おんちかひにて御座候間おろか愚いへご雖さばりも障さばりなく成
 就たいたし申候まう譬たとへて申候まうへば片田かたぬ舎なに生うまれて京きやう都と
 へ旅立たびだちをなすや如おほし御祓おほらひを唱となふるは歩行あゆむが如ちやうく聽ちやう
 聞もんいたすは道筋みちすぢを問まあきらむるにて其所そのどころ々の風景ふうけい
 を眺ながめ名所めいしよ古跡こせきを問まさだむるが如ごとく聽聞ちやうもん疎そ々そしき
 時ときは其所そのどころ々の風景ふうけいにまよひ足あしをこゝめ休息きうそくし又また

は思おもひわづとひて横道よこみちなどへ迷まよふ事ことあり古歌こゝかに
道みちの邊べの清水しみづなぐる、柳やなぎかけ

しばしこてこそ立たちこまりつれ

白川しらがはの關せきにも我われはこゝまらじ

みちの奥おくにぞたづねいりぬる

世よの中なかよ道みちこそなけれ思おもひ入いる

山やまのおくにも鹿しかぞなくなる

兎こに角かくに我わが思おもひを止やめて神かみの御教みをしへを御聽聞ごちやうもん候まべし

皇太后宮大
夫藤原俊成
が述懐の歌

神通自在

問日しんぐさくたう信心得道ひさくの人々こゝろにも心こゝろも安やすく身みもやすく家いへも
安やすくなご申事まうしごとなくて空むなしく暮くらし候人々ひさくこれあり神じん
通自在つうじざいなどいふ所ところへは及およびがたきやう覺おぼえ申候まうしい
かゝの事ことに候まや

答日かみ神かみの御誓おんちかひに候間あひだ相違さうゐなき事に候まへごも我わが
家いへを出いでて修行しゆぎやうの運はこびもなく道みちを問まあきとむる心こゝろも
なき人々ひとくは是非ぜいひもなき事に御座候またしゆぎやう又修行またしゆぎやう候まへごも

疑うたがひの心こころを生しやうじ信しんずる心こころうすく聽聞ちやうしん候こてもこ
 の處ところは尤もつともなれども此處このところは斯様かやうにては有あるまじ
 など我わがはからひにて考かんがへなごする人ひとは神明しんめいの御光おんひかり
 をば吾思わがおもひにて隔へだて申候まをす我思わがおもひはからひ出いで申候まをすは
 皆我みなわれ賢かしこしごおもふ慢心まんしんにて此慢心このまんしんの思おもひ出候いでへば
 神明しんめいの御光おんひかりをへだて御守おんまもりうすくなり申候まをす只々ただただ返かへ
 すぐも我われはかしこき者ものよご思おもふ心こころを捨すてて我われは愚おろか
 なる者ものぞご思おもひて御教おんをしへを守り候まもは、神明しんめいの御光おんひかりに

て物ものの道理だうりも分わかり心こころも安やすく身みも安やすく成行なりゆき申まをべく候こ

飮食少食

問そのもと日つれ其許そじきは常せうじよくに飮食少食おんをしへがよろしきこの御教おんをしへに
 御座候おんをしへがいかゞのちゑに候こや

答おしよくだいしよく日つれ美食大食おんをしへを好このみ候こへば身體しんたいを破やぶり心こころはくら
 くなり必かならず身み貧ひんに成行なりゆき申候まをすて慢心まんしんおこり申候まをす其故そのゆゑ
 は大食美食たいしよくびしよくを好このみ申候まをす者は人ひとの食しよくの不足ふそくするを
 思おもふ心こころなく人ひとの苦くを助たすけ救すくふの心こころなく只々ただただ我身わがみ

の益みきのみ思おもふものなり我わが一飯いつばんをのこして人ひとの飢うゑを
 救すくふの心こころなく百ひやく姓しやうの勞らうを思おもふ心こころなし又また大食美
 食きけつは氣血濁にこりて心こころ自おのづから惰弱だじやくになりゆくものなり
 故ゆゑに神明しんめいの御心みこころに適かなひ申まをさず加護かごうすくなり候ま
 苦勞くらう禍わざはひ絶たえずして貧ひんなるものなり又常またつねに美食びしよくの
 みなして身體しんたいを働はたらかざるものは癩症かんしやうの病強やまひつよくな
 りて塞ふさぎ又または怒いかり或あるひは深ふかく色いろに溺おぼるものなり故ゆゑ
 に福貴ふくきにして身みを働はたらかざる小兒せうにの時ときより美食びしよくをな

したるものは必かならず癩症かんしやうの病強やまひつよく色いろに溺おぼるもの
 なり恐おそれ慎つしむべき事ことなり

悪き行ひ

問しんぐ曰ごと信心得道しんぐいたし候者ものも悪あしき行おこなひをなし又または悪あし
 き思おもひをおこす者ものもこれあり候まをいかなる故ゆゑに候まをや
 答しんぐ曰ごと信心得道しんぐと申事まをは誠まことの心こころになれる種たねを戴いたり
 申候事まをにて未いまだ誠まことの心こころになり候まをと申事まをには御座
 なく候まを誠まことの心こころを得うる道みちと申事まをにて候段だん々く聽聞ちやうもんを

いたし修行候へば信の心にならるゝ種を戴き
 申候ものにて持前迷の心ゆゑ我持前が出るなり
 然れども信心得道の上からは必ず後悔の心いで
 我悪しと思ふものなり故に修行さへなさば追々
 誠の心になり悪き行ひ悪き思ひは失るものなり
 是を過て改るこ申なり信心得道せぬうちには後
 悔の心なく我思ひ善と思ふゆゑ悪き事段々つ
 るものなり日々募るこ日々薄らぐこは大なる違

なり故に信心得道の者は年月を経て迷の心うせ
 老年に至りて信の心つよくなるゆゑ自ら神
 明の徳を得るものなり又信心なきものは悪くこも
 あしゝこおもはず候まゝ老年にいたり段々迷ひて
 くゞくなり慾のみ募りて愚痴になり人に捨らるゝ
 ものなり老て愚になり候こ老て明になるこは
 天地の違なるべし有難き神明の御教尊むべき事
 なり是神明の御守にあづかるがゆゑなりよるこ

び給ふべし

夫婦の心

問曰夫婦の心一になり申さず候へば家内もをさ
 まりあしくて家業も行届き申さず候然るに夫大切
 ご思ふ心の忘るゝひまなく候へども兎角心ひと
 つになり申さず困り申候いかゞ心懸修行いたし
 候てよろしく候や承はりたく候

答曰御尋御尤なる事に候元男は陽にして進み

女は陰にして退く者にて御座候間心は別々に
 なり申候ものにて御座候然るをひとつ心になり申
 候ゆるゑに陰陽和合と申候和合いたし申さず候へば
 萬物生ぜず候此和合の教は神代の巻に委しく御
 座候先和合の道に入らんと思はゞ我思ひをすてゝ
 夫の心に委すべし是四命の教なり夫の心にま
 かせ夫の心に適ひ候へば神明の心に叶ひ申候
 神明の御心に叶ひ申候へば神明の御守り深き也

○夫婦の心

神明しんめいの神通力じんつうりきを以て一心ひさつこころになし下くだされ我思わがおもひと
 夫をつとの思おもひと違たがはぬやうになし下くだされ候夫をつとの心こころを
 我心わがこころのやうにいたし申まをべくも存候間神明しんめいの御心みこころ
 に叶かなはず候間いよく和合わがふせず六ヶ敷事むつかしきことのみ出来でた
 てこころを痛いため申候事に候総すべて人ひとも我われも一つ心こころ
 にならねば何事なにごとも安やすからぬものに御座候我常われつねに人ひと
 の心こころに適かなひ候やう心こころがけ候へば自おのづから神明しんめいの御み
 心こころに叶かなひ神通じんつう不思議ふしぎを以て人ひとの心こころわが心に適かなひ

一心ひさつこころに成申候なりて神徳しんとくをあらはし申候ものに御座
 候陰陽和合上下和合我いんやうわがふじやうげわがふわれも他ひたも和合わがふなさば修なまめずし
 て能修よくなさまり為なさずして能成よくなり申まをべく候唯四命たゞしめいの御教みをしへ
 を有難ありがたく御信心ごしんくなされ候はゞ自おのづから萬事ばんじ整さいべく
 候

天照大神あまてらすおほかみの御言葉おんことばにも一心ひさつこころの定さだまれる法のりをたづ
 ねて天あめの神かみの御心みこころに叶かなへご御座候有難ありがたき御事おんことに御
 座候

○夫婦の心

不足心

問曰信心の上からは不足の心あるまじき事と存候
 へども兎角不足の心おこり申候いか、修行致し
 申べきや

答曰不足の心おこり申候と申は金銀米錢衣類の不
 足の事にて有べく候信心の上からは金銀米錢を寶
 こせず法を寶とす金銀を寶とすれば金銀不足の
 心おこり愚痴になり心を苦むる者なり法を寶

として修行の志おこり候へば不足の心なく金
 銀衣類は自と足るものなり金銀衣住の不足と思
 ひ候は法の修行の不足なる故なり法の修行不足
 なるは朝ゆふ御祓の修行聽聞の不足なるより起
 り申候法の修行出來候へば福貴にして自在身を
 得る者なり故に只々日夜に法の不足なる事のみ思
 ふて修行あるべく候恐れながら東照宮様は萬民
 を我子よりも厚く御惠み遊ばされ御身に替助け救

はん事を思召され候まゝ、福貴は四海に満ち萬民を
 手足の如くになし自在身を得給ひ神通廣大御威徳
 限りなし是法心を以て老たるを父の如く稚者を
 子の如く思召し御慈悲の深きのなし給ふ所なり其
 外法心厚き者自ら位を得禄を得るもの古今多
 し故に唐國の孔子も是をいへり
 故大徳 必得ニ其位一 必得ニ其禄一 必得ニ其名一
 必得ニ其壽一

徳といへるものは萬民を子の如くに思召給の御
 徳なり

腹立

問曰我等事生れ付腹立しきや持前にて候處近頃信
 心の徳にや段々うすらぎ候へども兎角其心おこり
 困り申候いかゞ修行致候てよろしきや

答曰腹立しきと申は心の病にて我心もて療さん
 と存候ても力およばぬ者にて御座候 信心の上か

らは御祓御修行怠りなく候へば段々に病も薄らぎ申ものに御座候猶我にもかゝる病あるゆゑ人にもさまぐの病あるべくと思召し人の病にて心を苦むるを見ては愍と思召御介抱なされ候は、神明の御心にも叶ひ我病も自ら平癒申すべく候人々の病を介抱いたし候身の上になり候は、我病は癒るものなり我々事も病持にて困り申候御同門中御介抱ゆる助かる身の上と日々喜び申

候其許にも人の病を御介抱なされ候は、又々人の介抱にあづかり御助りなさるべく候まゝ然のみ御苦勞になされず候て御祓聽聞の薬を用ひてなほる時節を御待なさるべく候

早苗うゑ朝なせふなに水かけて

田の草こりて秋のみのりを

氣質

問日人々様々の氣質ありて十人よれば十人の思ひ

あり是何ゆゑなるや

答曰此體を生ずる時の産靈の縁に因ものなり其

元 天之御中主神の御徳は唯一なれども産靈神の

縁に因ものなり心の病を生ずる始なり故に大

日靈貴を産給ふに至りて我々が如く人體と成下り

給ふを天の岩戸に籠らせ給ふて岩戸開し給ふによ

りて其修行によりて 天之御中主神と同體同根に

ならせられ候まゝ天照大神と崇め奉つるなり此

オホヒルメ
ムヂノ命
(和魂)
ツキサカキ
イヅノミタ
マアマサカ
ルムカツヒ
メノ命
(荒魂)

故に我等が教ふる修行の本元とする者なりかゝ

る故由あるによりて我々が爲には天之御中主神よ

りも尊く思ひ奉るは天照大神なり過し頃教

一にて其人々の心々なるをいづれよきやと問給

ふにつきてよめる

蒔し種かゝすもほゞで瀆菜草

もえいづるころになりにつけるかな

瀆菜草二葉の時はかはらねど

生しげるころは已おのがさまぐ

濱はまなぐさ菜草花はかずぐさきわけて

結むすべる種たねはなにかかはらじ

生おひしげる千ちり々の木き草くさもおち葉はして

あらはれたまふ産土うぶすなの森もり

永世傳

問曰永世傳ながよのでんと御祓おほらひといづれが功徳くどくの優まさり候またくや又功徳利益ごくりやくのかはり候や

答曰永世傳ながよのでんと御祓おほらひとは其元そのもと一いつにて候しか然しかしながら

御祓おほらひは勤つとめ易やすく永世傳ながよのでんは勤つとめ難がたく候それゆゑ夫故それゆゑいまだ信しん

心しんも戴いたき申まをささず候者ものはつとまりがたく候おほらひ御祓おほらひは

勤つとまり易やすく候そのひこく其人つと々まの勤やすり易やすきにまかすべく候

尤もつとも病人びやうにんなどには少々せうくづ、利益りやくの違たがふ事ことあれど

も夫それは勤つとめ候おのつがへば自わかと分わかり申まを候ちやうもん 聽聞ちやうもんは信心しんじんの

思おもひを増まし御祓おほらひ永世傳ながよのでんは此身このみの罪科つみさかを滅ほろぼし病やまひを

はらひ申まを候それ 夫それゆゑ聽聞ちやうもんいたし有難ありがたき御事おんことと存ぞん候

ても行ひ出来申さず候時御祓又は永世傳修行候へば行も自ら出来申候譬て申さば車の兩輪の如くにていづれも大切の修行にて候御同門中よく御修行なさるべく候信心得道の人もはじめは怠勝の者ありて聽聞もいたし申さず御祓も勤めざる人もこれあり候へども夫は御同門方御催促の他力雄の神德にて勤まり申候ものに候間御同門方必々親くなし給ふて朝夕顔見合候事宜

く候不沙汰はよろしかとず候

御同門

問日其許は弟子を御同門中なご申され候か
なる故に候や承はり度候

答日我弟子に相違なき事には候へども

天照大神の御法を白川伯王殿より某へ御傳授下し置れ候を取次いたし門人へ授け申候事ゆゑ其授かり候人を尊びて御同門と申候事にて他に向ひ

申候言葉にてはなく法中の者へ申候言葉にて候
 他人に對して申候には門人弟子など申候事にて候

右は自問自答の言葉をおこし御同門中御相續のため
 めに送り申候其許事我に成代りて讀あげ説聞せ候
 を神明への御奉公ごんじ怠べからず深く思ひ
 くて愚筆をめぐらし候事ゆる繰返しく讀考へ
 て其心を察し諭しまめさるべく候尚おひく書

正 鐵 (書判)

男也どのへ

送り申べく候まゝ能々勤め給ふべし

神道唯一問答書合卷終

明治三十一年四月十三日印刷
同 三十一年四月十八日發行

定價金貳拾錢

東京市四谷區東信濃町九番地

編輯兼發行者

加藤直鐵

東京市麴町區飯田町三丁目十番地

印刷者

菟道春千代

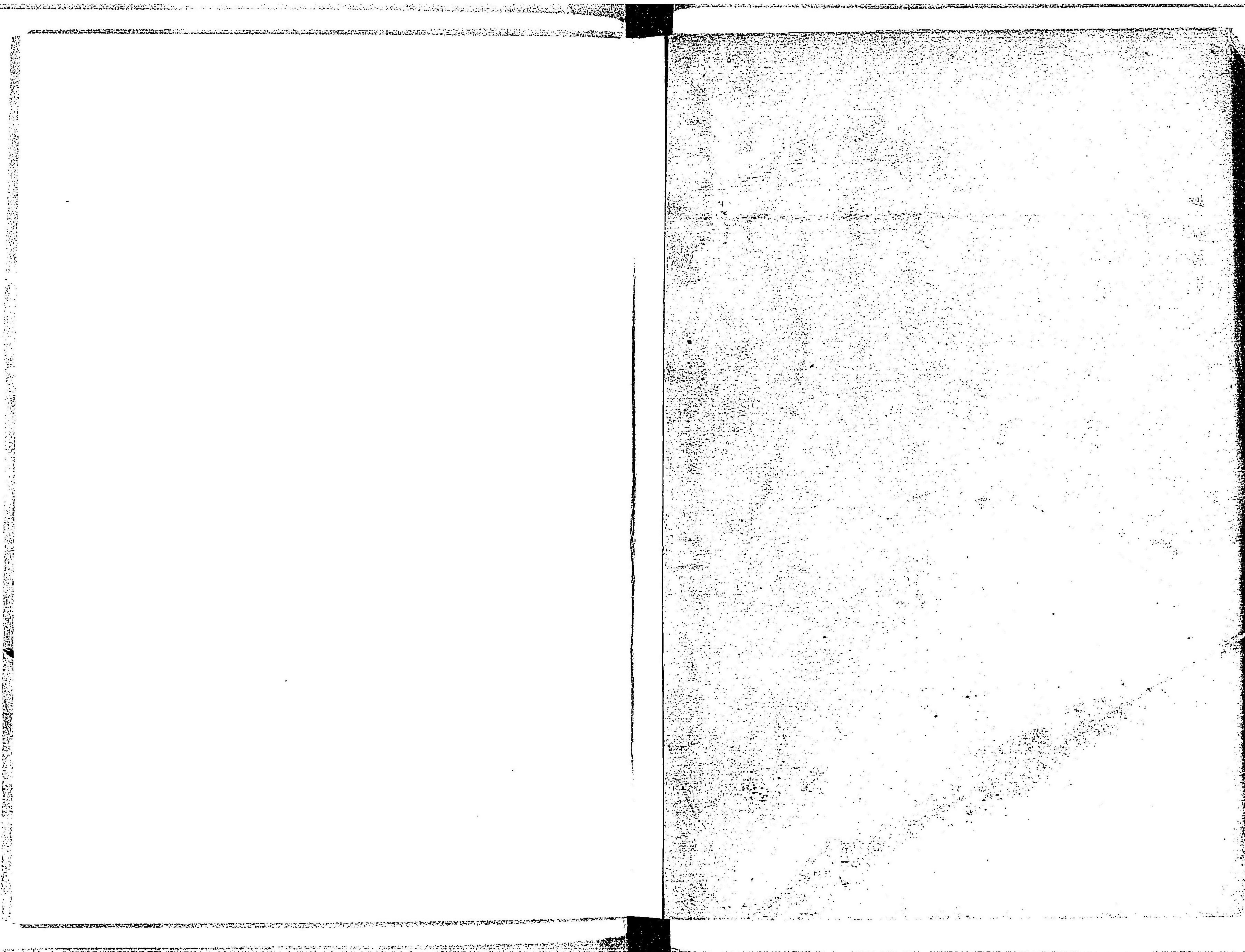
神道禊教各教會御用印刷所

東京市麴町區飯田町三丁目十番地

印刷所

精美館

館主 菟道春千代



1950

特45

149

神道唯一問答書合卷

国立国会図書館

014692-000-4

特45-149

唯一神道問答書合卷

井上 正鉄/著

M31

ABB-1129

